

# 特別支援学校におけるドローイングワークショップの 実践報告

梶原 紀子・梶原 良成

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第5号 別刷

2018年8月3日



# 特別支援学校におけるドローイングワークショップの 実践報告<sup>†</sup>

梶原 紀子\*・梶原 良成\*\*  
もうひとつの美術館\*  
宇都宮大学教育学部\*\*

これまで長年、美術館において障害を持った方々へ向けてワークショップを含めた創作の支援活動を行ってきたが、この度初めての試みとして、特別支援学校でのワークショップを行う機会を得たので、その実践内容や児童・生徒の創造的な表現活動の啓発への意義・成果について報告する。

キーワード：特別支援学校 ワークショップ ドローイング 知的障害教育 美術教育 表現活動

## 1. 実践の背景と目的

福祉事業所などに通う障害者の表現活動は、近年インターネットやSNSなどの普及による発信や、障害者を対象とした公募展などの増加などにより、国内外で注目を集めるようになってきた。

しかし、特別支援学校の学校現場における障害者たちの表現活動は、なかなか外に伝わって来ない。まれに目にする特別支援学校在籍の児童生徒の特筆すべき表現活動は、学校での活動ではなく、個人的な活動によるものがほとんどであり、それを専ら家族が個人的な努力によって、外部に発信している。

美術の授業が、全国の99%の特別支援学校において行われているという池田・児玉・高橋による調査報告がある<sup>\*1</sup>が、それらがどの程度児童・生徒たちの特性に配慮した創造的な創作活動であったかどうかは十分に明らかではない。いっぽう、全国でごく一部の熱心に美術の授業を行っている特別支援学校での作品制作における成果は質的にも量的にも突出している。<sup>\*2</sup>

特別支援学校の創作物として学校内外で発表され

る例は少なくないが、美術の創作物として考えると余りにも表現の幅が狭過ぎる場合が多く、ここでの表現としての創作活動とは根本的に区別して考えたい。この活動の意味としては、作業の習熟的な意味合いはあるとしても、独自の表現の現われなどがみられる創造的な活動とは全く異にするものであり、自発的な表現行為のための支援が行われているとは考えにくい。

そこで、創造的な創作活動への導入的な意味合いを持つ活動として、もうひとつの美術館と附属特別支援学校とが連携して、ワークショップを開催することを企画した。もうひとつの美術館は、栃木県那珂川町の里山に建つ明治大正の元小学校校舎を再利用して、2001年より、ハンディキャップを持つ人の芸術活動をサポートしながら、「みんながアーティスト、すべてはアート」をコンセプトに、障害の有無・専門家であるなしを超え、アートを核に地域・場所や領域をつないでいく活動を行っている特定非営利活動法人である。

ワークショップは、もうひとつの美術館がコーディネートし、障害者施設や特別支援学校でのワークショップに多数の実績をもつファシリテーターを外から招いて行うこととした。その開催により、“表現することの愉しさを味わう”ことで、それぞれの感性を刺激し、自発的表現を誘発し、美術に親しむ第一歩としたいと考えた。

<sup>†</sup> Noriko KAJIHARA\*, Yoshinari KAJIHARA\*\* : Practice Report of Drawing Workshop at Special Support School

Keywords: Special Support School, Workshop, Drawing, Intellectual Disability Education, Art Education, Expression Activity

\* MOB museum of Alternative Art

\*\* School of Education, Utsunomiya University  
(連絡先: kajihara@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

## 2. 実施方法

### (1) 実施日時

- ・平成29年10月6日 10:30-12:00  
(その後の関係者による懇談会 12:00-12:40)

### (2) 対象者

- ・宇都宮大学教育学部附属特別支援学校 小学部・  
中学部・高等部の児童生徒と親26組52人

年間カリキュラムはすでに組まれているなかで、学校行事中ではなく、秋休みの親子活動として希望により参加した。それに、PTAの担当の方と先生方、もうひとつの美術館スタッフ2名、大学院生1名がサポートメンバーとして加わっている。

### (3) 実施場所

附属特別支援学校体育館

### (4) コーディネーター（主催者）

もうひとつの美術館、梶原良成

### (5) ファシリテーター

中津川浩章氏

中津川浩章氏（神奈川県小田原市在住）は、25年前から全国の特別支援学校や障害者施設等において開催される数多くのワークショップでファシリテーターとして関わっている美術家である。

## 3. 実践内容

事前にブルーシートの上に3本の幅90cm長さ10mのロールの画用紙が準備されている。描画材料として、クレヨンを持参することとし、予備が用意された。

松島校長と梶原（良）の挨拶のあと、中津川氏から、今日のワークショップについてオリエンテーションがなされた。中津川氏のワークショップへのスタンスがよく示されている。

「今日のテーマはアクションドローイング、後ろにある細長い紙に絵を描く活動を行います。教育ではなくて、表現ということで、こうしちゃいけないよとか、こうしてねではなくて、いっしょの空間にいることを楽しむ、ひとりの子が暴走してもOKだし、ひとりの子が寝ちゃったりしてもOK、全肯定的な空間と時間をみんなでつくっていききたい。とすると絵を描いた子も絵を描かない子も同じように心が満たされる。今の時代って何かをしなきゃ行けないとか、こうするべきだということがとても多いんですけど、今日はそうじゃない時間をみんなとつくっていききたいと思います。大切なのは作品じゃな

くてみんなの心の中で何が起きているかが一番大事で、それをみんなできたらと思います。」

参加者は3本の画用紙に児童・生徒8・9人ずつ、親は付き添っても離れていてもよい、というグループ分けとした。

ワークショップ・スタート。以下、ファシリテーターの声かけを記載する。

- クレヨンの好きな色を一色選んで、ゆっくり長いまっすぐな線を引こう。・苦手な普段使わない色を使って、蛇みたいなにゆるにゆるした線を引こう。お友達の線と繋げてみよう。・好きでも嫌いでもない色を選んで、ジグザクした線を描こう。お友達の線と繋げてね。・好きな色に変えていって、今度は点々点々と描いてね。・今度は渦巻きを描いてみよう。スピードアップしてね。声を出しながら。・今度は丸を描こう。いろんなところに丸々を描いて。大きなまんまる、小さなまんまる。・次はおにぎりみたいな三角。いろんなところに三角。色を変えていくのもいいよ。紙からはみ出して、ブルーシートにかかってもいいよ。・三角の次はキャラメルのような四角。いろんな大きさの四角。移動してもいいよ。友達の（線の）上に描いてもいいよ。《ここまでで、開始より20分間あまり》



ワークショップ風景（1）右上に中津川氏

- （楽器を鳴らし始める）  
(タンバリンを叩く) 音に合わせて描く。・(トライアングルを鳴らす) 目を閉じて描こう。次に目を開けて描こう。・(鈴を鳴らす。参加者の一人も鈴を鳴らし始める)・(木琴を鳴らす。二人の参加者がトライアングルを鳴らす) みんなは音に合わせてどンドン描こう。(木琴ストップ)

《この間、8分間あまり》

- 画面を見てください。白いところがまだたくさん。いろんな形を塗りつぶしていきってください。(誰かがタンバリン、トランアンゲル、木琴などを演奏している。)《この間、8分間弱》
- 二人1組(親子)で縦に長い線を引きます。好きな色を選んでください。・ゆっくりゆっくり川みたいな線。紙からはみ出しちゃっていいよ。クレヨン、折れちゃっていいよ。・今度は二人人組でによりよした線を引っ張る。・次は新幹線みたいな、速い線。・つぎは二刀流。2色選んで両手に持って。《この間、8分間弱》
- 最後に自分の好きなものを描こう。お花、食べ物、飲み物でもいいよ。・(楽器で遊ぶ子、寝そべる子、画面の上を歩く子、絶叫する子)・お家や学校で普段できないことをいっぱいやりたいと思っているので、好きなものを描いてくださいね。《この間、13分間ほど》
- もうそろそろおしまいにしましょうか。・他のグループの作品を見てみよう。・(みんなで作品とともに記念撮影をしてワークショップを終了)《この間、8分間あまり》
- 中津川氏、松島校長、梶原(紀)からの挨拶で活動を終了。

参加者は、ドローイングワークショップに参加したくて参加したというより、親子活動だから参加したというのが、正直なところだと思われる。当初は、何をするのか分からなかったためか、児童・生徒の表情は皆硬かった。何もわからなかった状態から、白紙のまま、ふだん一緒に活動することのない小学部から高等部までの特別支援学校に在籍する児童生徒とその親たち参加者が、体育館に広げられた三本の幅90cm長さ10mのロール紙に、クレヨンを使って描きすすむうちに急速に馴染んでいったのが見て取れた。

プログラムの20分過ぎから、打楽器でリズムを作ったり、かけ声や緩い指示を聴くうちに、いつのまにかほぐれ、体全身を使いながら、赴くままに表

現をするようになっていた。

絵を描くのが苦手らしい子も参加していたが、ファシリテーターの誘いで、予め用意していたタンバリン、トランアンゲル、カスタネット、鈴、木琴などの打楽器を渡すと自ら鳴らし始め、絵を描く人たちの行為と音を奏でる行為がバラバラではなく、微妙な関係を保ちつつ、一緒に活動していた。

打楽器によってリズムを刻むと、子どもたちは自然に身体で乗ってきて、より自発的に描く行為に集中しているように見える。

特別支援学校の子どもたちは一般校の子ども以上に個々の特性の幅が広い。いきなり全開で描き出す子もいれば、すぐくスロースターターな子、何かきっかけがないと描き始めない子など、一律の進行を無理に当てはめるのではなく、各々の気分任せながら、入りやすいきっかけをファシリテーターは作っていた。絵を描くのが苦手な子に描かせるのではなく、好きな打楽器を選ばせ、その場になじませるなど、みんなが愉しく創作する環境に上手く導いていた。その辺りの対応の仕方は、障害のある子どもたちの創作活動支援を長年行ってきているファシリテーターならではのものと感じた。



ワークショップ風景(2)

後日、参加した保護者に自由記述のアンケートをお願いした。26人中21人から回答があり、その一部を以下に記載する。

- ・親子で楽しい時間を持つ事ができました。音に合わせたりして線を描くのははじめてでびっくりしましたが、学年・学部を超えて、みなさんと一緒に活動できてよかったです。ありがとうございました。
- ・親子とも共同制作は初めての体験で、大変有意義

な時間を持てました。感じた感じを線や点で表現する、というのは、とても新鮮な体験でした。また機会があれば参加してみたいです。

- ・初めての体験でできるか不安でしたが、自由に好きなものを描く事ができたので楽しそうでした。普段あのように無心で描くことなんてないので私も楽しませていただきました。ありがとうございました。
- ・いい経験ができました。ありがとうございました。長〜い紙があるんだと驚きました。運動しながら書いている感じで、しかもたくさんの人とひとつの作品を作れ楽しかったです。絵の具とかでも描いてみたかったです。また参加したいです。
- ・絵を描くことに興味のない子に、かわりに楽器を触らせて貰えました。配慮していただき感謝しております。
- ・家庭では絶対できない大きな紙を前に少し興奮気味でした。「三角を書きましょう」と言われても、指示には従えませんが、彼女のペースで地道に楽しそうに描いていました。
- ・初めてアクションドロイングに参加させていただきました。親子で楽しく過ごす事ができました。ありがとうございました。
- ・大きな紙に絵を描いたのは初めてでしたが、とても楽しかったです。子供と一緒に絵を描く機会も減りつつあったので、良いコミュニケーションが取れました。
- ・最初はキャラクターや動物といった絵を描くのかと思っていましたが、長い大きな紙に線や丸などを紙いっぱいにかいて、普段ではできない体験が出来てとても楽しかったです。手・足や服にクレヨンがついて、カラフルなもようになっていたのもおもしろみの一つと思いました。
- ・私も久しぶりにクレヨンを使って、自由にかいたり、体を使ったりして、楽しい時間を過ごす事ができました。体全体を使って体験できたことは、楽しさの中で体を使うことができ、とても楽しくよい体験だったと思います。
- ・親子で、なかなかできない貴重な体験をさせていただきました。子供も楽しかったようで、終始笑顔でした。ありがとうございました。
- ・今まで経験した事がないことで、すごく楽しかったです。自由に子供も楽しんでいました。
- ・普段から絵を描いたりそめたりということを好ん

で一人もくもくやるタイプの子ですが、手が汚れたりする事に少し敏感な所があり、汚れるとすぐ拭いたり手を洗ったりしている子です。今日はたくさんのお友達やお母さん方と一緒に汚れを気にせず長い時間クレヨンを手を持ち集中して楽しんでいました。私は隣のグループで時々我が子に声をかけたり様子を見たりしながら別々に手と膝を汚し久しぶりに子供達との時間を過ごさせていただきました。

- ・ただ自由になんでも書いていいですよ、と言われるとぎゃくに何を書けばいいかとまどう気がしますが、マルを書いてとか音にあわせてとかある程度の設定をしてもらえたので、その中で好きなだけ描くというのがとても気持ちよかったです。貴重な体験ができました。ありがとうございました。
- ・最近ではクレヨンを持つこともなくなっていたので、自由に、好きなように、に初めはとまどっていましたが、音に合わせて、など、表現がどんどん楽しくなって最後の方では思ったままの絵・点・線にも力が入っていました。親子ともにとっても楽しませて頂けて、企画から開催まで大変だったと思いますが、多くの方達のおかげで心に残る時間を過ごせました。ありがとうございました。
- ・高等部となり、実習を重ねる間に、我が子のような知的に重い子は生活介護という型での就労先の体験(実習)の中で、余暇の過ごし方として「ぬり絵」を渡されることが何度もありました。しかし、線という枠があり、その中を塗る活動は好き嫌い、得手、不得手があり、我が子には決して楽しい活動ではありません。今回のような、ダイナミックな、枠がない自由な描き方の表現活動は知的に重い子でも取り組みやすかったです。初めてのことにすぐ取り組めない子なので、1回でなく、繰り返しこのような活動に気軽に参加できるところが身近にあったら、福祉施設でこのような活動があったらいいのにと親として思いながら参加させていただきました。子どもはまずじっと見ることから参加でしたが、よく見ていて、家でクレヨンで何か書こうという行動が見られました。
- ・初めてみんなで創作できて、とても有意義な時間でした。子供たちの表情も良く、普段とは違う所も発見しました。このような機会をくださり、ありがとうございました。私も参加させて頂き、楽しい時間になりました。



これまで、このワークショップのような表現活動を経験したことがほとんどなかったことがわかる。感想としては制作の楽しさ、共同制作の良さ、声かけの的確さ、親も参加しての活動の楽しさなど、ほとんどが好意的な感想であった。また、再度の開催を期待する声も数多く寄せられた。

ワークショップ後に、関係者で、ワークショップの振り返りや附属特別支援学校での図工・美術の授業や子どもたちの将来と美術教育の関係など、有意義な意見交換をすることができた。

#### 4. 事業の成果

附属特別支援学校においては、独立した美術の授業は行われておらず、作業という枠組みに取って代わられている現状がある。今回は、授業としてではなく、リクリエーション活動の親子活動としてではあったが、特別支援学校で初めて表現活動のワークショップを開催することができたことに大きな意義があったと考えている。

参加者たちにとっても、初めての体験であり、最初固かった表情が徐々にほぐれて、最後には笑顔になって、親子共々楽しんでいたり、そして、見学していた先生方も児童・生徒が普段の学校生活では見られないほど集中して取り組み、楽しんでいる姿に驚いていたことだけを取っても、このようなワークショップの意義を見出すことができよう。

特別支援学校に通う知的障害や発達障害をもつ子どもたちは、言葉による表現が十分でない一方、一般の子どもたち以上に感覚的に多感であったり、造形表現への意欲が高かったりする場合が多い。今回のドローイングワークショップのような、全身の体を使い、表現することの愉しさを味わう機会が増えれば、特別支援学校の児童生徒たちは、より気軽に表現活動に取り組めるようになり、そのことでより



ワークショップ後の撮影，出来上がった作品とともに。

感性を刺激され、彼らの本来得意とする能力をより伸張していくことが期待できよう。

#### 5. 今後の展望

近年の障害者の創作活動への支援は、特別支援学校の卒業後に行われることが多いが、在学中の図工・美術などの創作活動を整えることも重要なことと考える。すなわち、特別支援学校における、一定の枠にはめた作業一辺倒の授業だけでなく、生徒自身の自発的な創作活動を支援していくことが重要であり、卒業後の人生のQOLを大きく左右するのではないかと考えられる。

また今年度、特別支援学校でワークショップを開催したのは、この附属特別支援学校1校だけであったが、今後は県内の他の特別支援学校でも開催し、体験を通して、創作活動はだれもが楽しむことができるということがわかるよう、ワークショップの開催を広げて行きたい。

#### 付記

本事業は、宇都宮大学平成29年度地域連携・貢献活動支援事業「障害の有無に関わらない表現活動」として助成を受けている。

#### 註

- \*1 全国的な調査に、池田・児玉・高橋による「特別支援学校における美術の実施実体に関する全国調査」,美術教育学(美術科教育学会誌),第38号,2017.3,がある。
- \*2 とくに美術の活動が活発な特別支援学校として静岡県立藤枝特別支援学校焼津分校が知られ、卒業後も「waC(wonderful art Community ワンダフル・アート・コミュニティ/通称ワック)として、活発な制作活動を行なっている。作品集として、「waC/wonderful art Community」2016.8,アート・コネクト・しずおか

平成30年3月30日 受理







# Practice Report of Drawing Workshop at Special Support School

Noriko KAJIHARA, Yoshinari KAJIHARA